

## 竹田市における西南戦争戦跡

はじめに

佐 伯 治

明治十年二月に鹿児島県の不平士族により勃発した西南戦争は、熊本城を囲んだ三万の大軍と熊本鎮台の兵士と政府軍が激戦を展開し、三月に入って田原坂においては二十日間の鮮烈な戦いが行われた。大分県下においても三月三十一日に中津で西郷軍に呼応した不平士族や平民が蜂起し大分県庁を襲撃した。四月末に政府軍が熊本城に入城するや西郷軍は人吉まで退き、体勢を立て直すために奇兵隊を組織して五月十二日に宗太郎峠を越えて大分県に進入した。

西郷軍の動きに対して、政府軍は竹田警察署に三十名、菅生すがせい仮分署・九重野仮分署・恵良原仮分署に十名、市場仮分署・今市仮分署に五名、玉来見張所・山手見張所・古町見張所に六名の警官を万一に備え配置していた。現在では、西郷軍と政府軍との激戦地は様変わりしており所在地や地形も改変してしまっている箇所も少なくない。このうち、確認できたものについて紹介することにする。

## 竹田における激戦地

石塚長左衛門を隊長とする騎兵隊四ヶ中隊で組織された百六十人の先発隊が竹田市入りしたのは、五月十三日であった。重岡から緒方を經由して片ヶ瀬に進軍した先発隊は、鷹匠町に明治九年に開庁した竹田警察署（岡城通りの袖谷そでやと鷹匠町に至る

十字路の一角に高石垣の上の敷地にあり、戦火を受け六月に向町に移転、明治十九年に殿町現歴史資料館の所に移転）・裁判所（明治十年に殿町の現在地に開庁）・竹田小区用務所を襲撃した後、本宮を古町に設けた。彼らは、竹田町の出入り口である会々橋（竹田駅前の現竹田橋）・下町橋（現豊岡橋）・滑瀬橋（岡城跡の滑瀬坂に通じていた橋で、橋台と柱穴が河床に残っている）・阿蔵橋（あぞう）に喚問所を設け通行者をチェックした。ここに、政府軍と西郷軍の竹田における壮絶な戦いが始まったのである。

十四日には、後続部隊が竹田に入り、八ヶ中隊で組織された総勢千八百余人が、本宮を下本町の豪商難波屋に置き集結したのである。難波屋は、明治二年の『総町繪図面』では、下本町通りが表通りで塩屋（現存しており登録有形文化財になっている）、難波屋、佐賀屋等の町屋が軒を連ねている。八幡小路は裏通りで塩屋掛屋敷、難波屋掛屋敷が存在している。本町通りから八幡小路に入ると、難波屋の南側対角に御客屋敷（市指定史跡）が位置している。平成十二年三月には難波屋掛屋敷の発掘調査が行なわれカマド跡を有する建物跡や石臼が二列に配列された建物跡など六棟の建物や井戸・池等の遺構を確認している。なお、御客屋敷は、士分以上の宿泊所で岡藩の迎賓館としての役割を担っていた場所である。

十七日には、旧岡藩士であった堀田政一は、旧藩士や平民に廻し文を出し十八歳から四十歳までの男子を各戸一人づつ西浦町の正覚寺（現存）に集合させ、新政府に反対行動している西郷軍に協力するため報国隊を組織（約六百人）した。西郷軍は、民家に対して銃器の供出を命じ、弾丸は、尾平・木浦の両鉦山より鉛を調達し、竹田小学校、七里蔵、豊音寺（現存）に弾薬製造所を設置した。竹田小学校は、岡藩の藩校であった「由学館」の跡に平成七年まで校舎が建っていた場所である。由学館は、安永五年（一七七六）八月に袖谷に建てられ、天明二年（一七八二）十二月に伊豆坂に移転。さらに、天保三年（一八三三）施設拡充のため近戸谷と稲葉川が交わる河畔に移築された。慶応四年（一八六八）には、文武両道を図るため鷹匠町にあった経武館と合併した修道館が設立された。明治五年八月学制の公布により、竹田小学校となり、後に作曲家瀧廉太郎や彫刻家朝倉文夫の母校となっている。藩政時代には、由学館跡から稲葉川の対岸に渡るために七里橋が架けられ、河川沿いに石垣が

築かれている上の敷地に七里蔵があった。七里蔵は、承応二年（一六五三）十二月七里村に米倉が建てられ、寛文十一年（一六七一）焼失のため現在の所に御普請されている。廃藩後は、大正十一年（一九二二）私立女学校が移転し、昭和三十四年（一九五九）三月、竹田営林署庁舎（現大分森林管理署竹田森林管理センター）が完成されている。

十九日には、食料調達のため久住・三重に出動し加島屋及び津の国屋の倉庫に収めた。『総町繪図面』によると加島屋は、中本町通りに面し、八幡小路を挟んだ難波屋掛屋敷と御客屋敷側に掛屋敷を有する広大な敷地を持つ豪商であった。津の国屋は、難波屋と下本町通りを挟んだ北東側に面し、裏に掛屋敷を広く有していた。薩軍の本営であった難波屋と道路を隔て隣接していた商家であった。

西郷軍が大分県に侵入した報せをうけて、偵察隊一ヶ小隊は、玉来附近にまできて西郷軍の状況を偵察し、二十一日に主力部隊の熊本鎮台第一三連隊の第一・第三大隊と砲兵隊は、荻町山崎を経て恵良原に到着し指揮所を設置した。西郷軍は菅生と宮砥方面から政府軍を挟みように攻撃を仕掛け荻町馬背野峠で激戦となった。

二十二日、政府軍は恵良原から玉来にむけて前進し、高橋文蔵宅（玉来）を本陣においた。政府軍は阿蔵口、薩摩軍は扇森神社（現存）・お兼様山・中川神社（現存）<sup>写真④</sup>・崩岩<sup>写真④</sup>・鬼ヶ城に陣を敷き銃撃戦を展開した。政府軍はこれに対して、工兵隊を派遣して拜田原西方に塹壕を掘って抗戦したが、結局は、扇森神社附近を占領したのみであった。夜に入ると、西郷軍は斥候を放って政府軍の背後をおびやかし、扇森神社一帯も危険となった。お兼様山は、拜田原の竹田医師会病院の裏山で北西に位置する。お兼様とは、岡藩三代藩主久清の娘である。家臣の田近家に嫁ぎ、貞享四年（一六八七）に三〇歳で没し、拜田原山に葬られていることから、この山をお兼様山と呼んでいる。崩岩は、中川神社から南東の鬼ヶ城に向かって延びる阿蘇溶結凝灰岩の切立った岩壁が露呈している。岩盤直下には、稲葉川が蛇行して堀となり天然要害となっている。現在では、国道五七号や豊肥本線の開通及び運動公園通りの街路工事により削平され孤立した台地となっている。

二十三日、政府軍は、右翼隊（第三中隊を主体とし阿蔵口より鬼ヶ城を攻撃）・中央隊（第一大隊を主体とし崩岩より中川

神社一帯を攻撃）・左翼隊（第二大隊を主体とし古城を攻撃）・予備隊に分かれ、西郷軍に対して一挙に攻撃をかけた。翌日にかけて各地で壮烈な戦闘が展開したが、特に、中川神社をめぐる攻防はすざましかったようで、現存する同神社の拝殿・壁・柱には無数の弾痕が残っている。なお、薩摩軍の偵察中に捕らえられた重岡警察分署の藤丸警部は、二十三日の朝、稲葉川の河原において斬殺された。時に藤丸警部三十三歳であった。現在、西光寺前の稲葉川河川敷に石碑が建てられている。

二十四日、激戦の末に政府軍は、崩岩・中川神社を占領し、鬼ヶ城・蛇塚をおとした。岡城跡から鬼ヶ城に至る丘陵には、舌状台地が北へ幾重にも延びている。薩摩軍は、南側に位置する鴻の巢台、亀甲台、胡麻生台へと退却することになる。鴻の巢台は、最頂部に広瀬中佐の墓地があり、基部には地元有志によって鴻の巢台公園が完成している。亀甲台は、竹田市運動公園によって全域が削平されている。胡麻生台は、台地のほぼ先端部に国指定史跡田能村竹田墓所がある。

二十五日、警視隊は、神堤（直入町）で追分口攻撃隊と田中口攻撃隊の二隊に分かれ一隊は標高三七九mの法師山を占拠した。二十六日、薩摩軍・報国隊は、七里、千引の南方、平村、鏡の丘陵に天然の地形を利用して陣を構えていた。さらに、八幡山（大正公園）の北西に前進し政府軍に突撃を行った。二十七日には、濁淵川に架かる鏡橋で警察隊は薩摩軍と交戦を開始したが、薩摩軍の必死の抵抗や米納沢の間道を抜け鏡橋上流に迂回し背後を突く戦略に遭い、法師山に後退した。警視隊は、この壮絶な激戦によって七十八名の死者と百余名の負傷者を出したのである。一時は満徳寺口まで前進した警視隊は、竹田町に侵入できず、戦死者の収容、負傷者の手当、折からの雨で銃器の使用も出来なかったことから、二十九日まで休戦となった。国道五七号に架かる鏡橋の十字路口から、北方の直入町方面に至る道路は、岡城の城下町から四ツ口の肥後街道を結ぶ岡城路として江戸期より重要な道路である。

二十八日には、警視隊本隊が法師山。警視隊別働隊が、西に迂回して玉来で政府軍と合流。政府軍第一四連隊第三大隊が久住街道の平田に布陣した。二十九日の総攻撃で官軍は、城原井路を伝って古城へ突撃、中川神社からも援護射撃し古城を陥落させた。さらに、兵力で優る警視隊は、鏡方面からは濁淵川の溪谷に沿って渡渉し、挾田峠からも強襲して、ついに七里峠を

占領した。鏡からの本道は、敗走する薩摩軍の放火のため通行が出来なかつたため、尾根を伝い円福寺（現存）裏より竹田町下木に入った。政府軍の砲火と敗走する薩摩軍の放火により竹田の城下町は竹田町九一七戸、会々二八五戸もの家屋が焼失した。古城は、騎群城とも呼ばれている。国道五七号線から久住方面（旧久住街道）に向かう国道四四二号線との分岐点より約一・五kmの道路南側に接した、標高約三八〇mの独立丘陵上に位置する。中川神社からは、西側の約一・二kmに位置し台形状に遠望できる。頂上部は、東西約四一〇m、南北約五〇mの細長い平坦部分が造られている。現在城跡の東側は、公園として利用されており、山頂まで車道・登城道・駐車場が整備されている。頂上部の細長い平坦部分は、堀切によって大きく3つの曲輪に分けられている。台地上には、櫓台を有し、東側の一部と南側に土塁を廻らし、石積みを施した櫓台状遺構が現存している。天正一四年（一五八六）の島津氏豊後侵攻の折にも、岡城城主であった志賀親次（おかよし）の支堡として機能していた可能性は高い。

敗戦した西郷軍は、滑瀬（ぬめりせ）、片ヶ瀬、緒方町の原尻、河宇田を経て、宇田枝、小野市へ敗走し、一部は入田、門田から木野方面へと退却した。以後、三重、臼杵、佐伯と転戦し終結へと向かつていったのである。

### おわりに

政府軍にとっても薩摩軍にとっても、九州の山間部の中央に位置し、熊本からも大分からも、此所を通らなければならぬ交通の要所である竹田を死守することは非常に重要なことだったと思われる。阿蔵口と対峙する中川神社から鬼ヶ城跡、日田往還から久住街道沿いの要衝となる古城（騎群城）、肥後街道から岡城路を経由する最大の死傷者があいつぎ死闘を繰り広げた鏡橋付近、この激戦により江戸時代から築かれた城下町の屋敷のほとんどは焼失し、住居や肉親を失った被災者、戦火により多くの負傷者が出たことは、九州の小京都と呼ばれる静かな街にとって、悲劇であり大きな損失であったと思われる。近年、大分県文化課による西南戦争戦跡調査や西南戦争を記録する会により新資料の報告が行われ、幕末から明治新政府確立の変革期における歴史の大きな舞台に我が郷土が受けた事実が、今後明らかにすることを期待する。

参考文献

- 1 北村清士『西南戦争血涙史』（昭和四十年）
- 2 今永清二「西南戦争と竹田」『竹田市史・中巻』（昭和五十九年）
- 3 直入郡教育会『直入郡志』（昭和四十八年）
- 4 竹田市教育委員会『難波屋跡』（平成十三年）
- 5 荻町史編集委員会『荻町史』（平成五年）
- 6 西南戦争を記録する会『西南戦争之記録』（第一号～第二号）

（竹田市会々二三九五―二在住）



西南戦争絵図（竹田市立歴史資料館蔵）

竹田小学校跡



(写真①)

七里蔵跡



(写真②)

中川神社



(写真③)

崩岩周辺



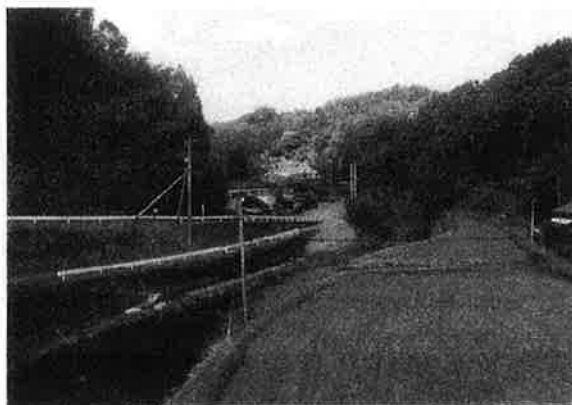
(写真④)

古城  
(騎群城跡)



(写真⑤)

濁淵川が流れる鏡の激戦地  
(写真⑥)





鴻の巣台公園



(写真①)

鴻の巣台にある銃丸痕跡のある墓石

